

教員長期社会体験研修 10～12 月期 研修報告

【研修先：北海道コカ・コーラボトリング株式会社】【研修者：東橋小学校 沢田 涼佑】

【担当部署】広報・CSR 推進部 広報・CSR 推進課

北海道コカ・コーラグループは、「北の大地とともに」を合言葉に、【環境】【食の安全と健康】【地域社会】の三つの領域を軸に CSR 活動を展開しており、『SDG s（持続可能な開発目標）』はその新たな指標となるものです。

今回の報告では北海道の持続可能な社会の実現に向けて、事業活動を通じた地域課題の解決に取り組む当社の CSR 活動を紹介します。

SDGs(エスディー・ジーズ)とは

「Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)」の略称で、2015 年 9 月の国連サミットで採択されました。国連加盟国 193 カ国が 2016 年から 2030 年までの 15 年間で達成することを目指して掲げた国際目標です。

17 のゴールと、それらを実現させるための具体的な 169 のターゲットで構成され、政府のみならず企業や一般市民にも課題解決のための行動を要請しています。



【海辺の環境保全活動～浜益川下海岸ごみ拾い活動～】

当社は清涼飲料水を扱う企業として、水資源保護活動推進のため道内各地で水を大切にする様々な取組を行っています。その取組のひとつとして 10/20(日)、石狩市浜益区浜益川下海岸のごみ拾い活動をしてきました。

浜益の海辺には、大きさや種類も様々のごみが見渡す限りに広がっていました。キャンプなどで使用され、そのまま放置されたと考えられるものもあれば、日本国内からではなく、大陸由来と思われるごみも多く見られました。総勢約 50 人、2 時間ほどのごみ拾い活動でトラック 1 台分ものごみが集められましたが、残念ながら時間内では拾いきれないごみもたくさんありました。



集められたごみ袋の山。
他にも漁の縄や網などが
大量に集められました。



大陸由来と思われる漁具やプラスチック製品。小さい破片になったものは数えきれないほどありました。

また、今回の浜益の海では、ごみ拾いだけでなく「ビーチコーミング」も体験することができました。ビーチコーミングとは海岸などに打ち上げられた漂着物を収集したり観察したりすることを言いますが、それ以外に最近では漂着ゴミの調査を意味することもあるそうです。区切られたエリア内で拾ったごみを素材や種類ごとに分別し、記録していきます。特に多く見られたものはプラスチック製品で、紫外線に当たって小さな破片になっているものは、拾っても拾っても無くならないほど、浜辺に無数に広がっていました。また地元の方によると、穏やかな天候の日には波打ち際に小さいビーズの様なプラスチック片が見られるそうです。この日は前日に通過した低気圧の影響で見られませんでした。報道などでよく耳にする「マイクロプラスチック問題」はどこか遠い海に限ったことではなく、身近な北海道の海にも当てはまる問題なのだとことを実感しました。また、ごみの中には川を伝って上流から海岸に流れ着くものも多いという話を聞きました。今回のビーチコーミングを通して、海を守るためには海の近くに住む人だけではなく、内陸に住む人も含め、全ての人の努力が不可欠と感じました。



【北海道の水環境を守る活動を応援～北海道 e-水プロジェクト～】



北海道と公益財団法人北海道環境財団と当社の 3 者協働で行う「北海道 e-水プロジェクト」は、北海道の豊かな環境を道民全体で保全し、未来へと大切に引き継いでいくことを目的に 2010 年に立ち上がり、今年で 10 年を迎えました。当社対象製品の売り上げの一部が同財団に寄付され、それを財源に北海道の水辺の環境保全に取り組む団体を応援するとともに、毎年 11 月には活動内容を広く発信する「北海道 e-水フォーラム」を開催しています。昨年 11/21(木)に開催された「第 10 回北海道 e-水フォーラム」では、採択団体の活動発表や「海洋プラスチック」をテーマとした特別講演、パネルディスカッションなどが行われ、200 名を超える参加者が集まりました。



2019 年度は「河川ごみ」「海洋プラスチック」や「生物多様性」などの問題に取り組んでいる団体が多く採択され、その活動報告も非常に興味深い内容でした。また多くの団体の報告の共通点として、実際の活動には団体のメンバーだけでなく地元や地域の住民、特に「子ども」が参加しているということが上げられます。環境保全の取組はその時・その場の解決だけではなく、長期的な計画や持続可能性が重要だと言われています。そのためそれぞれの団体が「地元の将来」のために、積極的に次世代の人材育成に取り組んでいるということが分かりました。

(北海道 e-水プロジェクト HP : <http://www.heco-spc.or.jp/emizu/>)

【容器の 2030 年ビジョン～】



昨今、大きな問題として取り上げられている「プラスチック」問題。私は今回の研修において当社の環境事業に携わっていく中で、この問題について学ぶ機会が多くありました。その中でプラスチックごみの代表と思われがちな『PET ボトル』は実はプラスチックごみ全体の 6%*1 に過ぎず、その内 98%*1 が回収され、しかもその 85%*1 はリサイクルされている優秀な「資源」であるということを知りました。そして日本コカ・コーラシステムでは、使用済みの PET ボトルをもう一度 PET ボトルに生まれ変わらせる「**ボトル to ボトル**」を推進し、2030 年までにサステナブル素材（リサイクル PET 樹脂または植物由来 PET 樹脂）の PET ボトルの割合を 100%とすることで、新たな化石燃料を使用しない容器の完全導入等を目指す環境目標である『**容器の 2030 年ビジョン**』を設定しています。<*1：※一般社団法人プラスチック循環利用協会及び PET ボトルリサイクル推進

協議会(2017)のデータから当社試算>

この目標が達成されれば、PET ボトルを生産するための新たな原料はほとんど必要なくなります。そしてそのためには、生活者が消費した PET ボトルを「正しくリサイクルする意思」が不可欠といえます。しかし、充分でない理解から PET ボトルが悪者となれ、「排除」されようとしているという報道を最近は見にすることもあります。PET ボトルは再栓が可能なので衛生的に飲料を持ち運ぶことができ、軽量でさらにリサイクルすれば資源になる点で環境負荷が低い、極めて優れた容器です。私はこの『容器の 2030 年ビジョン』を通して、持続可能な社会を実現するために、大人はもちろん子どもも「ラベルをはがし、キャップを取れば、PET ボトルは“ごみ”ではなく“資源”になる」ということを、理解することが重要だと考えるようになりました。

● 日本のコカ・コーラシステムが推進する「ボトル to ボトル」とは？



◎ 10～12 月を振り返って

私はこの研修を通して『SDGs』について考えました。そして SDGs を達成するためには今回紹介した「清掃活動」や「環境保全」、「PET ボトルのリサイクル」といった具体的な取組はもちろん、そういった取組を通した「次世代育成」が重要だと考えるようになりました。SDGs のゴールのひとつに「4.質の高い教育をみんなに」があります。このゴールを最も意識すべきなのは、我々教師です。そのためにまずは我々教師がこの『SDGs』について学び、自分の考えをもった上で子どもたちに関わっていく必要があると考えています。

